HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	雑誌『赤い鳥』における「殺す」「殺される」問題 : 欧米昔話再話作品を中心に
Author(s)	王, 玉
Citation	研究論集, 14, 83(右)-104(右)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57706
Type	bulletin (article)
File Information	14_018_Wang.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

雑誌『赤い鳥』における「殺す」「殺される」問題

――欧米昔話再話作品を中心に――

王　玉

要　旨

大正七年(一九一八年八月)、鈴木三重吉は「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純粋を保全開発するため」の話及び歌を創作し、世に広める一大運動を宣言し、『赤い鳥』を発刊した。しかし、創作童話、童謡以外にも、鈴木三重吉の手による作品をはじめとする、多くの再話作品が『赤い鳥』において重要な位置を占めている。特に、第一次世界大戦中にヨーロッパの思想、文化がこれまで以上に流入するようになったことにともない、欧米の昔話の再話が『赤い鳥』に数多く掲載された。

「私は、これまで世の中に出ている、多くのお伽話に対して、いつも少なからぬ不平を感じていた。ただ話が話されているというのみで、いろいろの意味の下品なもの少なくない」と当時の児童文学を手厳しく批判した三重吉は、積極的に芸術性の高い海外の作品を日本の子どもたちに紹介しようとした。しかし、外国昔話の再話作品が、どういう基準で選ばれたかはまだ明らかになっていない。

ところで、昔話は残酷な場面が多く、子どもに向いていないという説があるが、大正時代の代表的な児童雑誌として、『赤い鳥』における昔話の再話作品に「殺す」「殺される」など「殺害」もそのまま残っていることが多い。「殺害」が残された理由として、昔話における「殺す」「殺される」というモチーフが単に残酷性を表わすものではなく、独自の意味を持っていることが挙げられる。本論は『赤い鳥』の欧米昔話の再話作品群を中心に、作品中の「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」などの場面を取り上げながらその特徴を明らかにし、そこに現れた三重吉を代表とする『赤い鳥』の編集方針とその意図を検討したい。

はじめに

雑誌『赤い鳥』は大正七年（一九一八年八月）に創刊されてから、昭和十一年（一九三六年八月）鈴木三重吉の死まで十八年間続いた。関東大震災により、一九二三年の十月号、十二月号の休刊、また一九二九年二月から一九三一年一月までの一時休刊を除いて、確実に月刊ペースで、通巻一九六冊を出した。大正三年に第一次世界大戦が勃発し、戦時中に日本と外国の交流が盛んになると、ヨーロッパの思想、文化がこれまで以上に流入するようになった。それにともない外国童話の翻案もぞくぞくと出版され、『赤い鳥』にも欧米の昔話の再話が数多く掲載された。

鈴木三重吉は「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純粋を保全開発するため」の話・歌を創作し、世に広める一大運動を宣言し、『赤い鳥』を発刊したが、創作童話、童謡以外に、鈴木三重吉の手による作品をはじめとする、多くの再話作品が『赤い鳥』において重要な位置を占めている。ところで、昔話は残酷な場面が多く、子どもに向いていないという説があるが、その最も極端な例、第二次世界大戦後に唱えられた、ナチスの残酷な行為はグリムの昔話から影響を受けているというものであった。日本では昔話の残酷さに関する研究はすでに盛んにおこなわれている。その代表者の一人として、野村泫①は『昔話は残酷か』で「文芸学」、「民俗学」、「心理学」の三つの立場から昔話の残酷さを詳しく検討し、昔話の残酷さは独自の文体を持ちながら、けっして子どもに害をおよぼさないはずだと強く反論した。

大正時代の代表的な児童雑誌として、『赤い鳥』における昔話関連作品に「殺す」「殺される」など「殺人」問題はそのまま残っていることが多い。「殺人」というモチーフが残された理由として、昔話における「殺す」「殺される」というモチーフが単に残酷性を表わすものではなく、独自の意味を持っていることが挙げられる。本論は『赤い鳥』の欧米昔話作品群を中心に、作品中の「殺す」「殺される」「食べる」「食べられる」などの場面を取り上げながらその特徴を明らかにし、そこに現れた雑誌『赤い鳥』の編集方針と意図を検討したい。

一

『赤い鳥』の昔話の再話作品のリストアップに関して、丸尾美保②は鈴木三重吉の童話集などを調べた結果、ロシア昔話の再話作品が合計十六話と算出した。本論では、丸尾氏が検討した以外の国の昔話再話作品を抽出するため、主に以下の三つの作業をおこなった。

一、鈴木三重吉関連作品の調査。鈴木三重吉が編集した『世界童話シリーズ』（春陽堂　全十一編　一九一六～一九二六）、『世界童話シリーズ』（春陽堂　全六集　一九二九）、『春陽堂少年文庫』（春陽堂　全十五冊　一九三二）など童話集に収録された作品には国名が書かれている。また、『鈴木三重吉童話全集』（文泉堂書院　全九冊　別巻一巻　一九七六）の附言にも、どこの国の作品であるかが明示されている。二、『赤い鳥』関連作品の調査。『復刻　赤い鳥の本』（ほ

るぷ出版　全十六冊　別冊・解説一巻　一九八〇）は『赤い鳥』の寄稿作家小山内薫、楠山正雄、宇野浩二、菊池寛などの作品を作家ごとに収録したもので各序章において再話原作作品の国名などが記録されている。坪田譲治などが編集した『日本児童文学集成』（小峰書店　全三冊　一九六六）の解説にも作品経緯に関して詳しい説明がある。さらに、赤い鳥社が編集した『学年別赤い鳥』（小峰書店　全六冊　一九七九～一九八〇）の解説にも国名の記載がある。三、当時投稿作家の個人集の調査。小山内薫の『三つの願ひ』（イデア書院一九二五）と楠山正雄『かぐや姫』（金の星社　一九四七）には『赤い鳥』の掲載作品が収録され、その国名が記入されている。以上の作業で、国名が明記された作品は、総計八一編が抽出できた。内訳は、ロシア、ドイツ、イギリス、フランスをはじめとして多岐にわたる（付表『赤い鳥』欧米昔話関連作品）。ほかに国名が書かれていない外国昔話の再話作品も存在すると考えられるが、これは今後の研究課題として検討しつづけていきたい。

筆者の調査の結果、『赤い鳥』に国名が明記されている欧米昔話関連作品は合計七十六篇である。「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」ことが登場したのは六十八篇で、相当な頻度で現れている。現時点に原話が確定できるものは以下の九篇である。

「正直もの」（大正七年八月号）は太宰治の「走れメロス」の動物版で、ギリシア神話のエピソードとドイツの「シルレル」、すなわちフリードリヒ・フォン・シラーの詩をもとに創作した事が明らかにされている。

「蛙の王女」（大正七年八月）はロシアの民話で、アレクサンドル・アファナーシェフの編纂したロシア民話集に収められている。他の国にも類似した民話が残っている。

「三匹の小豚」（大正七年十二月号）はヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムによる童話集『グリム童話』に収録されている『狼と七匹の子山羊』と幾つかの共通点を持っている。

「山羊の耳」（大正十五年二月号）はギリシア神話の一部で、寓話として独立しても語られる『王様の耳はロバの耳』の再話である。

「白い鳥の話」（大正八年五、六、七月号）は、巌谷小波訳のグリム童話「七羽鳥」（『幼年雑誌』明治二十四年九月～十一月に収録）に類似する話である。

また、松居直の調査によると、

「おなかの皮」（大正十一年九月号）の原型は北欧の昔話の「大ぐいの猫」（K. D. WIGGIN & N. A. SMITH 編 “Tales of Laughter” の中に Greedy Cat として収録される）が、三重吉の「おなかの皮」と全く同じものは、ストーリー・テリングの研究家 S. C. ブライアント（S. C. BRYANT）の “How to Tell Stories to Children” の中に「猫とオウム」という題で収録されている[3]。

渡辺茂男の調査によると、

「大いたち」（大正七年六月号）は、Katherine B. Jacobson という婦人が編集した Myths and Legends of British North America（A. C. Mcclung Co. Chicago）の第一四二頁 Wolverene and the Geese（東部エスキモー人の昔話）を再話したものである。

「星の予言」（大正八年二、三、四月号）は、Anne Macdonell・Italian Fairy Tales. T. Fisher Unwin, London の中の What the stars foretold. という名まえでているイタリヤのタスカニー地方の昔話を再話したものである④。

また、丸尾美保の調査によると、

「雪娘」（大正八年一月号）がロシア昔話となっているが、ラングの The Yellow Fairy Book にある "The Snow-daughter and Fireson" と同じ話で登場する。⑤

『赤い鳥』における昔話の再話作品を研究対象とする場合、研究上の難点について、渡辺茂男は主に二つの大きな問題があると指摘している⑥。第一に、作者が確定できないことが挙げられる。『赤い鳥』に寄稿した作者の中、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、宇野浩二など当時文壇で活躍していた作家がいる一方、丹野てい子、小野浩、樋口やす子など『赤い鳥』の編集者もいる。編集上の便宜、経済的理由などで、鈴木三重吉が他人の名をかりて発表した作品も多数ある。また、『鈴木三重吉童話全集』、『鈴木三重吉全集』など全集に収録されている作品は全てが鈴木三重吉の作品であるとは断言できないことは桑原三郎⑦の調査によって明らかになっている。桑原氏は掲載時の作家が誰かを判別することが不可能に近いことを指摘している。

もう一つの問題点は、『赤い鳥』に掲載された数多くの外国昔話などの再話作品は、そのほとんどが再話したものの典拠、原作などを明示していない。『赤い鳥』の目録に原話を示されたのは僅か数編しかいない。また、『赤い鳥』における昔話の再話方式も様々である。大正十三年二月第十二巻第二号に掲載された『正直もの』はグリム童話の話を潤色した作品である。それに対して、大正八年二月第二巻第二号に掲載された『平気な平左』は日本人を主人公としているが、これは作者の小山内薫がアイルランドの昔話を日本風に書き換えた作品である。どのように再話するか、あるいは原作に対するアレンジ度合は作者によってそれぞれ異なっている。

そのため、本論では昔話の再話作品を坪田譲治、小川未明などの創作童話とは異なるものの、一つの作品群として捉え、その中に現れた「殺す」「殺される」問題を「食べられたもの」「殺されたもの」と「食べられない主人公、殺されない主人公」の三つに分けて、物語中の殺害を検討する。

二

『赤い鳥』の欧米昔話の再話作品には、「食べる」「食べられる」という関係が多数見られる。この関係について、小澤俊夫は『昔話が語る子どもの姿』において以下の三つに分類している。第一、動物同士（人間と動物）の命をめぐる物語。第二、人間が自然の世界を侵略している物語。第三、究極の仇討ちの物語（相手を食う、あるいは相手にその肉親を食わせる）⑧。しかし、昔話の中の動物が動物として見えるかどうかは問題として残されている。それに対して、村瀬学⑨は、子ども向けの絵本に出てきた動物たちは動物と人間両

方の性格を持っている「架空の動物」で、「動物」と「人間」との間をつなぐ「中間もの」であると指摘した。ところで、『赤い鳥』関係作品に登場するそれらのものたちは、「現実のもの」に近い存在もある一方、全く現実性のない存在もたくさんある。登場する人間を除いた動物たちは自然世界の動物に近いもの、喋ったり笑ったり人間に近いもの、魔力を持っている超自然的な存在など様々な形として現れている。以後、本論は食べられる自然界の動物、食べられた擬人化された者、超自然者の食べ物と三つに分けて物語中に食べられたものを検討する。

Ⅰ　食べられる自然界の動物

表Ⅰの統計が示すとおり、人間のように喋り、考える「中間動物」以外に、人間性のない現実性をもった動物（A）は作品中に多数存在している。しかも、その多くは「食べられる」側に立っている。「食べる」側は人間や、人間性を持っている動物などで、自然界の動物と異なる特性を持つことに対して、「食べられる」側は自然界の動物、すなわち人間性のない「食べ物」にカテゴライズされる。

まず、A1の「焼肉」「魚の切れ」「豚の肉」「魚の腸」は、そのものが登場せず直接「食べ物」の状態で現れる。「食べる」ことの出発は「姿をしているもの」が切り刻まれ、解体され、その「姿」を失う過程にある。そして、現代人は「姿を失ったもの」を食べるとき、そこに存在した「命」を感じ取らず、美味しく食べられると村瀬学が論じた[10]ように、物語中の「焼肉」「魚の切れ」「豚の肉」「魚の腸」はその前身としての豚や魚に関する描写は一切せず、一つの名詞で「食べ物」という立場に置かれて、「生きもの」の姿を喪失している。それこそが鸚鵡や、大熊に「美味しく」食べられることの大きな前提になっているともいえる。また、A2の鶏を狐が食べる、羊を狼が食べる、蠅を蜘蛛が食べる、水牛を獅子が食べるなどにおいては、「鶏」「羊」「蠅」「水牛」が「獲物」から「食べ物」へのプロセスを経た。自然世界の獲物とたちにおいては自分の「命」を守る逃走が省略されている。彼らを食べる狐、狼などは喋ったり魔法を持ったり、自然界の動物以上に「命」を感じさせるが、「獲物」たちはただ捕まえられる存在、食べられる存在であるため、「命」としての存在が非常に薄くなっている。

最後に、A3の「蜂の子」「羊」「鶏」「鼠」などの食べ物は、結果的に食べられる運命から逃れえた。『大いたち』の「蜂の子」と『悪狐』の「物置小屋の中にある鼠」は物語の中で実際には存在せず、それぞれいたち、狐が鴨、猫を騙すための「言葉」としての誘惑である。『鳥の言葉獣の言葉』の羊と『鷲と亀と禿頭』の仔犬は番犬と狼、鷲親子が狙おうとする獲物であり、『雪だるま』の鶏は、狐のお爺さんとお婆さんに対する要求である。そしてそれらは、いずれも食べ物にありつくことができなかった。物語で食べられなかった彼らをめぐる、食べる、食べられる関係は、行動ではなく、すべて「会話」で為されており、「言葉」レベルで表れている。

II　食べられた擬人化された者

表IのBが示すとおり、食べられた擬人化された者が物語中にも多く見られる。大いたちが鴨を食べる、狼が兎を食べる、狼が子豚を食べる、狐が鶏を食べる、自然世界にある食物連鎖が物語中に如実に反映されている。しかし、『兎と針鼠』の針鼠が兎をうまそうなご馳走だと思う、『黒い小鳥』の蟻が象の耳を噛みだす、『雪だるま』の雪だるまが狼や熊に食べられることを心配しているなど、現実の食物連鎖にそぐわないものも多数存在している。物語中に語られている「食べる、食べられる」関係は自然世界の厳しさの反映だと言われてきたが、そのあり方は自然規則に従うものがある一方、捕食関係を逆転させようとする傾向も見受けられる。

ところで、昔話のなかで、人間と動物は食べる食べられる存在であう。人間も食の循環の要素の一つだということは数多く強調されてきたが、擬人化された「もの」の食べる、食べられる関係において、人間が彼らを食べた例はほとんど見られない。『大いたち』に出てくる擬人化された鴨を食べた土人は唯一の例外である。「土人は早速鍋の蓋を開けて、煮えかけた鴨を、一匹も残さず、がつがつ食べてしまいました。そして、あとの骨を、すつかり鍋の中へ入れといて、さつさと帰つて行きました」[11]。しかし、大いたちは踊っている鴨たちを捕まえて煮たのに対し、土人は直接擬人化された鴨に相対していない。彼が食べたのはすでに「食べ物」になっている鴨である。人間が食べるどころか、擬人化された「もの」によって食べられる危機が『ガラスの山』『骸骨島』では見られる。つまり、人間は擬人化された「もの」を食べない。擬人化された「もの」は生き姿を持つ命としての存在で、物語のなかで人間の食べ物ではないと規定されていることが分かる。

III　超自然者の食べ物

表IのCが示すように、魔法を持つカマス、何千人も食べられる猫、人を食う鬼など、物語に出てくる生き物たちは、自然世界の動物、人間に近いものがいる一方、このような自然世界にありえない超自然的なものもまた多数存在している。

『ぶくぶく長々火の目小僧』のぶくぶくは何千人の兵士と馬を一気に飲み込んで、またお腹から吐き出した。『欲張り猫』の猫は牝牛・栗鼠・百姓・鼬・狐・兎・小熊・大熊・お嫁さんの行列・お月さま・お日さまを食べ尽くし、お腹の皮が破れてみなが中から逃げ出した。『おなかの皮』の猫は鸚鵡・お婆さん・驢馬・馬方・王さま・王妃・兵隊・象・蟹をすっかり呑んでしまい、最後にやはりお腹に穴が開き食べ物たちに逃げられた。ぶくぶく、猫二匹はそれぞれ異なる物語に属しているが、何百人の行列、何十匹の象などをペロリと食べてまた生きたまま逃がしたことは同じく、その食べる行為はある意味で儀礼化されている。人間は古くから供犠においてものを神に捧げる行為などには経済的な見返りを期待しており、食べ物を神に捧げることによって、神から食べ物を得ようとする。[12]物語のぶくぶく、猫は「もの」を食べ物として食い、またその食い物を「もの」に返す、まさしくものの命をコントロールできる神の名残と思われ

る。神に食われたものは、死んだことなく、そのまま元に戻る。神の食べ物は「いのち」と関わっていないと理解できよう。

まとめ

人間は自然界の動物を食べる、超自然なものは人間を食べる。それ以外の「食べる、食べられる」関係において、人間は関与していない。動物は「自然界」「人間界」「超自然界」で、食べたり、食べられたり、物語の食べる食べられる関係を築いている。食べられたもののその多くは、「生きもの」の姿を失っているもの、逃走しないものである。「食材」として扱われたものは「命」を喚起していない。ところで、猫が魚の腸を食べる際、ぶくぶくが千人の兵士を丸呑みする際、また針鼠が兎を自分の巣に運んでいく際、三つの「食べる、食べられる」場面はいずれも血が流れていない。血が流れていないことに関して、殺したという言葉の中身が抜かれている昔話の語り口は非写実的であると小澤俊夫[13]がすでに指摘したが、血が流れていないとは、「殺す」ことを非写実的にする一方、「いのち」ではなく、「食材」であることを暗示しているのではなかろうか。一つ例を挙げてみると、『がらすの山』の中には、主人公は山に住んでいる鷹の足を切って、その血で死んだ人たちを生き返させたという話がある。血は命の象徴で、血がないということは命ではないと解釈すれば、物語中の食べる、食べられる関係はつねに命の不在という背景で行われているといえる。

三

「食べる、食べられる」関係において、食べる側は食べる目的で殺す、食べられる側は食べ物として殺される、両者の間に食欲という本能が働いていると言える。しかし、食べるという本能から離れて、「殺す」「殺される」ことはどう理解すればいいのか。昔話における殺害問題に関して、これまで多くの研究者は「残酷」であるかどうかに重点を置いて論じてきたが、本論は「殺す」「殺される」から現れる動物、超自然者と人間の関係性を検討したい。

Ⅰ　殺された動物

表ⅡのAは殺された動物の集計であり、合計十一である。「動物に殺された」「人間に殺された」の二種類に分けられる。動物同士の「殺し合い」関係に関わる動物は全部自然世界に近いものではなく、喋ったり踊ったりする擬人化されたものである。こういう擬人化された動物の殺し合いは、大きく、強いものが弱いものを殺すパターンと弱いものが強いものを殺すパターンに分けられる。『蟻と驢馬』の蟻はほかの虫を見つけると、すぐに噛み殺す。蜘蛛にさえ手を出す蟻は大変気が強いと物語中で強調されている。強い蟻は強いからほかの虫を気軽に殺し、また自分の強さをみせつけるためにも虫を殺そうとする。『悪狐』の狐はほかの動物を散々食べて、最後にとうとうライオンの王様に殺された。狐は食う本能に応じてほかの動物を殺したと言えるが、それに対して、「いいか、だれもずるいことをした

り、おれをばかにしたりすると、このとほりだぞ」と威張ったライオンの王様は自分の権威に服従させるために狐を殺した。『あひる』の狐は鶏小屋に侵入して、そこにいる七面鳥と鶏を瞬く間に一匹も残さず引き裂いてしまった。蟻に嚙み殺されたほかの虫、ライオンの王様に殺された狐は相手の強さの犠牲者であると言えるが、引き裂かれた七面鳥と鶏は、鶏小屋に突然侵入してきた狐によって理由なく殺された。強い動物が弱い動物に殺された話は昔話によく登場する話であり、これらは知略のみ強い者などに対抗できる弱い人への慰めであると、社会風刺であると読み取られてきた[14]が、ここでは強い動物が弱い動物に殺された理由に注目したい。『三匹の子豚』の狼は二匹の子豚を殺した後に、三匹目の子豚に殺された。『金の毬』の熊と蛇は「大変な悪者」として、獅子と猫に殺された。弱者の反撃にあっての死には理由が明確に作られている。言い換えれば、強いものが弱いものを殺すときには理由を必要としない。強いものが絶対的な権力の持ち主として、弱いものの命をコントロールできる。それに対して、強いものが殺される場合は必ず理由付けがなされる。理由がなければ弱いものは逆襲できないとも言える。

人間にとって、動物は食料、衣料であり、狩猟際の使役物であり、家畜化された物質的な存在である一方、恐怖や敬意の対象として、精神的にも影響を受けている[15]。ところで、物語の中で、人間に殺された動物たちは物質的な存在であることが多い。『大法螺』の男は獣を殺して、その皮を袋に拵える。『かじり大王』のお爺さんは鶏を殺して、その頭から宝石を得た。『がらすの山』の若者は野猫を捕へて、捕まえるやいなやその爪を剝した。『ボビノが王様になった話』の召使は犬を殺して、その心臓を手に入れた。こういう動物たちは皮、宝石、爪、心臓が必要とされ、人間の物質的な要求のために殺された。こういう物質的な存在としての動物は食べ物としての動物と同じように、擬人化されていない。また、『鳥の言葉獣の言葉』の番犬たちは主人を裏切った罪で羊飼に殺された。『やんちん猿』の虎は羊を食べた嫌疑をかけられ、羊飼に殺された。番犬は家畜化された動物で、虎は野生の動物であるが、どちらも人間が食料・衣料とする羊を独占しようとしたため、人間によって殺された。動物と人間の物質的な関係は一方向で、人間は支配者として君臨し、その立場は侵すべからざるものと定められている。また、虎は猿と相談したり、喋ったりするが、羊飼の前ではただの虎になり、擬人化されていない。『鳥の言葉獣の言葉』の羊飼は番犬たちの言葉がわかっても、決して直接会話することはしない。物語の中、動物たちは擬人化されていたとしても、決して人間ではなく、両者の世界は隔絶していることがわかる。

II　殺された超自然者

表IIのBは殺された超自然者を表すもので合計八例である。そのうち、人間に殺されたものは五例で、超自然者同士の殺し合いが三例である。まず、『灰色の小人』の鍛冶屋は槌の一打で、宝物の番をしている犬を殺した。『がらすの山』のボリッシは山を守る鷲の足を切り払って殺した。ここでの犬は超自然の能力を持っていないが、

魔法使いの番犬として超自然者側に置かれる。その血が人間を復活させる力を持っている鷲も超自然者側として見られる。しかし、犬を殺して宝物を手に入れること、鷲を殺して金の林檎を得るなど、人間に殺された結末が「物質」と繋がっていることは、超自然者も物も同じである。また、『蛙の王女』にワシリサ姫はイワン王子の助けで魔法使いを成敗した。『山羊の角』のカリフは水甕の忠告に従い山羊の角で大男を突き刺して殺した。『蟹の王子』の王子は鳥の忠告を聞き入れて毒が入ったお菓子を魔法使いのお婆さんに食べさせて殺した。『骸骨の島』の若者たちは骸骨の助けで魔物を死に追いやった。魔法使いや魔物を殺すために、人間はつねにある種の助けに巡り合う。マクッス・リューティによって[16]、昔話の中の人間が原則として助けを持つ存在で、救いを必要としているという見解が示された。ここで注目したいのは、自力で動物を気軽に殺せる人間は、他からの力を借りければ超自然者を殺せないという点である。人間は超自然者を殺しえたとしても、超自然者は人間以上に力を持った、強い立場であることは否認できない。また殺された魔法使いや大男や魔物は人間に殺される前、人間を食べようとしたり、命を狙ったりとしている。自分、また人間の仲間の命を守ろうとする殺しは、動物を殺す場合と異なり、人間は受身であり、自分より強い超自然者に反撃する。このように動物同士の殺し合いにみられる弱肉強食関係は人間と超自然ものとの間にも適用される。

Ⅲ　殺された人間

表ⅡのCは殺された人間を表しており、合計九例ある。まず、王様に関わる殺人が五例ある。『ふくふく長々火の目小僧』と『少年と魔女』の王様は求婚者や家来を殺した。切り殺された求婚者、死刑にされた赤士爵の命は王様が完全に支配している。人間世界の頂点に立つ王様はほかの人間を殺す権利を持っている。ところで、強者は弱者に殺されることがあるように、王様もまた殺される。『雪娘』の王様を死なせたのは、雪娘という超自然者であり、『あひる』の王様を殺したのは、蜂たちである。『魔法の魚』の王様は、家来が命の水で生き返るのを見て、己を斬り殺せと役人に命じ、役人たちは命令に従って王様の首を斬り落とした。命の水が尽きたため、結局王様は自殺に成功することとなった。命の水、死の水を手に入れた家来は乱暴な王様を殺すだけの力を持つようになっても、殺されても、決して反撃しない。それどころか、反撃しようとする意識自体が全くなかった。つまり、同じ人間が人間の王様を殺すことは物語が許さない。次章に詳しく述べる「主人公が殺されない」という原則を守るために、物語は巧みに王様を自殺させた。

また、『大当てちがひ』の中で、お爺さんに川に落とされた三人は最初から「悪者」と定められている。『ある男爵のお話』の男爵に殺された人も「悪い奴」と明言されている。昔話に出てくる「悪者」は殺される結末をむかえることが多いが、「悪者」だから殺されるべきというルールが働いているというより、「殺す」ことを正当化するために「悪者」と位置付けされている。特に、男爵は偶然にある男

の頸の上へ飛び下りたので、その男は頭の骨を折って死んでしまった。男爵は「併しよかったよ。そいつは大変な欲張りの悪い奴で、いつも飼料を法外にたかく売りつけるので、ひどく人に憎まれてゐたのださうだ。だからおれが殺したってだれもぐずぐず言ふものはゐなかったよ」と自己弁明した。言い換えれば、殺された人が悪人ではない場合、男爵の殺人は罪になる。「殺人」行為は正当化させなければ、「悪い」行為になる。前述したように、強者は横暴な振る舞いをするから弱者に殺されるが、「殺す」こと自体は「悪くない」。それに対して、強弱に関係なく人間同士の「殺す」には、いままでの「殺す」と異なり、初めて殺人行為に道徳的な規準が見られる。言い換えれば、物語中の「殺す」行為は基本的に「道徳」と関係なく、そこに「教訓」性というものも見られないといえる。

まとめ

動物が動物を殺す、超自然者が超自然者を殺す、人間が人間を殺すことにおいて、弱肉強食のルールが働いている一方、弱いものは他の力を借りて逆襲することもありうる。現実世界を反映しながら、昔話はつね弱者へ目を向けていると特徴付けられてきたが[17]、「殺す」「殺される」関係は現実世界ではなく、「空想」世界の中にあることは注目したい。「空想」世界中の動物が殺されるとき、超自然者が殺されるとき、人間が殺されるときに、殺すことは基本的に一瞬で終わる。殺される前に告知を受けることなく、自分が殺される結末は知らない。殺されたらそこで終わり、「殺されたくない」ことは一切出てない。殺されるものに「殺されたくない」という感情を持たせないよう物語が決めているとも言える。殺されるものと違って、物語に殺されそうになっても、結果的に殺されない登場人物がいる。

四

前章では「食べられた」もの、「殺された」ものを中心として検討してきたが、食べられたもの、殺されたものは悪いものであり、弱いものであり、強いものであり、その形は多種多様で、必ずしも同じ性質を持っているとは限らないが、「主人公ではない」という共通点を持っている。それは物語の中に「主人公は殺されない」という鉄の掟がつねに作用しているからである。主人公はなぜ殺されそうになるか、どうやって殺される運命から逃げるか、こういう「殺す」は彼らにとってどういう意味を持っているかを、問題点として続けて検討したい。

まず、表Ⅲによって、殺す側に立つ人は、王様、お父さん、お兄さんの何れかに属している。王様は人間社会の統治者で、ほかの人を殺す権力が正当化されたことは前章で指摘したが、自分の子供を殺す「子殺し」はどう理解すればいいのか。近代社会においては、子供は個人としての人格を持った人間で、大人に守られるべき存在であると考えられている。しかし過去に遡れば、親が子を殺すということはそれほど珍しい現象ではなく、親のために子を犠牲にする

行為は親の正当な権利として広く認められていた。親が子供を殺す理由としては、貧しさによるもの、生活水準を保つために行われたもの、また障害を持った子供は社会適応が難しいために殺されたものなど様々である。ところで、『ボビノが王様になった話』で主人公のボビノは何年も学問をしたのに、動物の言葉よりほかに何も覚えていなかったので、お父さんはそれが気に食わず、とうとう彼を殺そうとしている。また、『三人兄弟』で、兄二人は、主人公の弟が父の死を願っていると嘘をつき、それを聞いて怒った父が弟を殺せと命じた。子殺しの正当性がみられる一方、学問がよくできないこと、親孝行しないことで子供を殺す親は現実になかなかいないことは明らかである。父が子供を殺すのに理由はいらないというより、子供がなぜ殺されるかという理由を、物語が必要としていない。とにかく、主人公を殺す運命に向き合わせないと済まないのである。

昔話の中に「殺す」「殺される」はたくさん出てきて、現実社会の残酷面を表しているとともに、それに対する恐怖が物語の原動力となっているという説がある。しかし、前に検討してきた「食べる」「殺す」ことは一瞬で終わらせて、食べられる側、また殺される側に命の危機を事前に知らせないのであるから、もちろんその恐怖についても触れられていない。『小人の謎』で、「さあ、おはじめ。いいか、明日の朝までにこの藁をすっかり金の糸にして見せないと、お前の命はないぞ」と王様に言われて、主人公の娘は「怖い」と思った。主人公は自分が殺されるかもしれないことを知って、「怖い」と感じながら、殺されないように自分の命を守ろうと努力し始める。「殺す」とは、現状を壊す手段として、主人公を危機に直面させる役割を果たしている。

ところで、昔話は口承文芸として、そのストーリーが違っても語りかたが一致するところは多い。昔話の語りかたに関して、マックス・リュティはヨーロッパの昔話を精密に分析して、主人公や敵対者を孤立的に語るという。同じ場面は同じ言葉で語るため、三回の繰り返される場面は、ほとんど同じ言葉で語られる。また、物事や性質を極端に語る。同書の主人公は、ストーリーの途中ではいろいろな目にあうが、最後には必ず幸せになるなど一定の語りの法則があることを突きとめている[18]「殺す」「殺される」をめぐる語りも自分なりにその法則に従っている。まず、表Ⅲの内容の列を見ると、『魔法の魚』で（王様は）「とうとうその家来を斬り殺しておしまひになりました」と『頓助の物語』で「この二人の兄が、頓助の油断を見計らって、夜更に頓助を海に突き落としたのでした」、「殺す」行為は実行されたが、それ以外の物語において、「殺す」はすべて「早速お前たち四人の命取るが、それでもいいか」「お前だって、一と切れでも食べると、すぐに切り殺すぞ」「そんな奴が王女を貰ぶどころか、これからすぐに切り殺してやる。こりゃ、ここへ来ておとなしく命をわたせ」と、会話として語られている。

実行されていない「殺す」は、主人公のこれから向き合わないといけない難関を予言している。予言としての「殺す」は、「処罰する」や「駆逐する」など他の表現に変えても成立すると考えられるが、物語中はすべて直接命に係わる「殺す」という表現を使ってい

るのは、昔話に極端性を好む法則が潜んでいるからである。たとえば、『ぶくぶく長々火の目小僧』と『山羊の耳』で王様に殺されたほかの王子さまの存在と、殿様に殺されたほかの床屋の存在が暗示されながらも、主人公は殺されない。「殺された」彼らのことは失敗の前例として冒頭部分に置かれ、成功して「殺されない」主人公との対比を明確にさせている。成功したらお姫さまと結婚できて、大金を手にいれるが、失敗したら殺される。もともと口で伝えていく昔話はこういう極端さによって人々に覚えられたと多くの研究者[19]がすでに指摘しているが、人間の命に直接係わる「殺す」「殺される」というものは、その極端性を極める最高の設定だと思われる。

物語の冒頭部に出た「殺される」危機と、半ばに出て来た「殺される」危機のいずれも「予言」として、ストーリーの緊張感を維持させる機能をもっている。昔話独自の文体が「殺す」「殺される」を必要としている。また、前章の殺されるものの例を挙げてみると、熱湯で殺されるとか、火で殺されるとか、毒殺されるとか、その方法が多岐にわたる一方で、その死に方に関する描写も見られる。それに対して、「予言」としての殺人は極めて抽象化されている。「すぐに斬り殺してしまう」「みんな王さまに切り殺されてしまいました」「早速お前たち四人の命を取る」「あなた方を殺しにまいりました」「その床屋を手討ちにしてしまはれるのでした。」「もう刀の柄に手をかけておつしやいました」文中に出てきた「殺す」「殺される」はすべて一言で簡潔に終わっている。かなり抽象化されている「殺人」＝殺す、殺されることの実体を語らないことは、肉体的な苦痛への想像を途絶えさせる効果をもつ。こういう主人公たちは「殺す」予言によって、自分を殺そうとする相手の正体を知っている。自分の命を脅かす元凶、それなりの解決方法を教えられた昔話の主人公は非常に多く、そして彼らは結末で命を救われる。昔話はきわめて主人公中心主義で、焦点化される主人公は聞き手の注意を喚起し、聞き手の同一感を呼び起こすという視点から考えれば、昔話の主人公が向き合う「殺す」は未知の恐怖は語らず、常に救いの出口を用意しているのである。

終章

「明治年代に巌谷小波によって開拓された日本の近代児童文学の歴史も三十年近かったが、それは西欧的な意味で近代とほど違いものであった。また、明治末年ことから大衆児童文学の荒廃が目だっていた。」[20]こういう状況に対して、鈴木三重吉は手厳しく批判した。

「私は、これまで世の中に出ている、多くのお伽話に対して、いつも少なからぬ不平を感じていた。ただ話が話されているというのみで、いろいろの意味の下品なもの少なくない。単に文章から言っても、ずいぶん投げやりな俗悪なものが多い。この点だけでも子供のために、いかにもにがにがしい気持ちがする。それから、材料そのものの選びかたにも考えの足りないのが往々ある。私はいろんな点に十分注意して書いたつもりである。文章としては、われわれが実

際に使っているだけの平易な純な口語のみを選んで、出来るだけ単純に書こうと努力した」[21]

丹野てい子など編集者の回想により、鈴木三重吉は『赤い鳥』の投稿作品を隅々までチェックしていたことが分かる。これまで、鈴木三重吉の児童文学の文章表現に対する執着は多くの人に知られているが、「材料そのものの選びかた」に関してはどうであろうか。特に、児童文学創成期の当時にあっては、児童のために紹介すべきものが余りに多くため、鈴木三重吉は積極的に芸術性の高い海外の作品を日本の子どもたちに紹介しようとした[22]。しかし、外国昔話はどういう基準で選ばれたかは今日まで明らかになっていない。例えば、「イソップ寓話」は海外の物語としては日本に最も早く入って来たもので、一五九三年に『イソポのハブラス（ESOPO NO FABVLAS）』として紹介されたことが始まりである。明治になってから翻訳が進み、『通俗伊蘇普物語』がベストセラーとなった。大正時代にも「農夫と蛇」などの話は多く翻訳され、再話されたが、『赤い鳥』には掲載されていない。農夫が雪の上で死にかけている蛇を助けたが、息を吹き返した蛇は農夫の子供に噛み付き、死に至らしめた。すぐさま農夫は斧で蛇を二つに切り裂いた。この有名な話の文末に「邪悪なものからは恩返しは期待できません」という教訓が付いている。教訓を、「人間のあらゆる可能性を拘束して、特定の生き方を強要する。すでに成立している社会構造と慣習の中で、もっとも傷つくことの少ない処生術を確認する」[24]手段と定義する場合、物語中の「殺害」はいうまでもなく「教訓」のために語られていることになる。「教訓」に従う「殺害」は『赤い鳥』に存在しないことは判別できる。

高山毅は「『赤い鳥』の文学運動は当時の封建的、非人間的な教育に対する反抗として出てきた。古くさい教訓の教育内容や学校唱歌に反抗するものとして、こういうものに比較的反感をいだいている中流以上のインテリゲンチャの少数に支持されながら出て来たのだ」[23]と指摘した。『赤い鳥』に掲載された昔話作品に登場した「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」は、その教訓性をなるべく避ける傾向をよく表している。

また、物語中の「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」は現実性のない、空想世界において行われていることが多いが、そこにも鈴木三重吉の編集傾向が貫かれている。鈴木三重吉は、当時の冒険、侠客、感傷などを売り物にする低俗な児童読みものに挑戦して、日本の童話はフェイブルとしては材料が実に貧弱で、トラデイションには大分おもしろいものがあるが、概して西洋ものの如くに豊富な空想がないかと自ら語っている。空想世界への探求において、物語を教訓から切り離そうとする三重吉の意欲が見て取れる。そのため、物語中に出てきた「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」は常に物語の中に存在し、物語の筋に従属している。

ところで、「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」は外国の昔話関係作品以外でも、『赤い鳥』に掲載された中国昔話、日本創作児童文学作品などにも存在する。例えば、大正七年八号に掲載された『敵討ち』は、のちの『鈴木三重吉童話全集』に『珊瑚』という

題名で収録されている。これは中国昔話の再話で、物語中に主人公の珊瑚はお父さんの敵討ちに地主を巧みに殺した。また、『赤い鳥』昭和七年一月号に掲載された新美南吉の『ごんぎつね』は後に小学校国語教科書の教材に選定され、一般的に知られている。その主人公のごんは誤解され、人間に殺された。こういう「殺害」は欧米昔話関連作品に登場したものと明確に異なる性質を持っている。欧米昔話関連作品以外に出てきた「食べる」「食べられる」「殺す」「殺される」はどのように意味を持っているか、『赤い鳥』にどういう役割を果てしているかということについては今後の研究課題としたい。

（おう　ぎょく・言語文学専攻）

注

① 野村泫『昔話は残酷か：グリム昔話をめぐって』（東京子ども図書館、一九九七年）

② 丸尾美保「雑誌「赤い鳥」掲載のロシア関連作品の考察」（『梅花児童文学』、二〇〇二年七月）七一頁

③ 松居直「鈴木三重吉の幼年童話」『赤い鳥代表作集　第二巻』（小峰書店、一九九八年）二五六―一五七頁

④ 渡辺茂男　前掲論文　一六三頁

⑤ 丸尾美保　前掲論文　七三頁

⑥ 渡辺茂男「『赤い鳥』と外国児童文学――特に民話について」（『赤い鳥研究』、小峰書店、一九六五年）一五七―一五九頁

⑦ 桑原三郎「解説・年譜・関係文献」『鈴木三重吉童話全集別巻』（文泉堂書院、一九七五）

⑧ 小澤俊夫『昔話が語る子どもの姿』（古今社、一九九八年）八七―一一七頁

⑨ 村瀬学『食べる思想』（洋泉社、二〇一〇年）一七〇―一七一頁

⑩ 村瀬学　前掲書　三八頁

⑪ 『赤い鳥』作品引用はすべて『赤い鳥　複刻版全一八巻一九六冊』（日本近代文学館、一九七九年）によるものである。

⑫ 村瀬学　前掲書　三八頁

⑬ 小澤俊夫『昔話入門』（ぎょうせい、一九九七年）七七頁

⑭ マックス・リューティ、野村ひろし訳『昔話の本質』（筑摩書房、一九九四年）一一九頁

⑮ 石田、濱野佐代子、花園誠、瀬戸口明久『日本の動物観　人と動物の関係史』（東京大学出版会、二〇一三年）三頁

⑯ マックス・リューテ、野村ひろし訳『昔話の解釈――いまでもやっぱり生きている』（筑摩書房、一九九七年）八六頁

⑰ 小澤俊夫『昔話とは何か』（小澤昔ばなし研究所、二〇〇九年）二三頁

⑱ マックス・リューティ、小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話――その形式と本質』（岩崎美術社、一九九五年）一一八頁

⑲ 小澤俊夫『昔話とは何か』三一頁

⑳ 菅忠道「赤い鳥の成立と発展」『赤い鳥研究』（日本児童文学学会編、一九六五年）七―八頁

㉑ 鈴木三重吉『湖水の女』（春陽堂、一九一六年）三頁

㉒ 滑川道夫「『赤い鳥』の児童文学史的位置」『赤い鳥研究』（日本児童文学学会編、一九六五年）三八頁

㉓ 上野瞭「寓話の時代から物語の時代へ――イソップ・ペロー・デフォ・スウィフト・グリム・アンデルセン――」（『児童文学読本　日本児童文学別冊』、一九七五年一月）一九六頁

㉔ 高山毅「児童文学の展望」『大正期の児童文学』（角川新書、一九六五年）三四頁

参考文献

鈴木三重吉『湖水の女』（春陽堂、一九一六年）
渡辺茂男「『赤い鳥』と外国児童文学――特に民話について」（『赤い鳥研究』、小峰書店、一九六五年）
菅忠道「赤い鳥の成立と発展」『赤い鳥研究』（日本児童文学学会編、一九六五年）
高山毅「児童文学の展望」『大正期の児童文学』（角川新書、一九六五年）
滑川道夫「『赤い鳥』の児童文学史的位置」『赤い鳥研究』（日本児童文学学会編、一九六五年）
桑原三郎「解説・年譜・関係文献」『鈴木三重吉童話全集別巻』（文泉堂書院、一九七五年）
上野瞭「寓話の時代から物語の時代へ――イソップ・ペロー・デフォ・スウィフト・グリム・アンデルセン――」（『児童文学読本　日本児童文学別冊』、一九七五年一月）
鈴木三重吉『赤い鳥　複刻版全一八巻一九六冊』（日本近代文学館、一九七九年）
プロップ、斉藤君子訳『魔法昔話の起源』（せりか書房、一九八三年）
マックス・リューティ、野村ひろし訳『昔話の本質』（筑摩書房、一九九四年）
マックス・リューティ、小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話――その形式と本質』（岩崎美術社、一九九五年）
マックス・リューティ、野村ひろし訳『昔話の解釈――いまでもやっぱり生きている』（筑摩書房、一九九七年）
小澤俊夫『昔話入門』（ぎょうせい、一九九七年）
野村泫『昔話は残酷か：グリム昔話をめぐって』（東京子ども図書館、一九九七年）
小澤俊夫『昔話が語る子どもの姿』（古今社、一九九八年）
松居直「鈴木三重吉の幼年童話」『赤い鳥代表作集　第二巻』（小峰書店、一九九八年）
丸尾美保「雑誌「赤い鳥」掲載のロシア関連作品の考察」（『梅花児童文学』、二〇〇二年七月）
小澤俊夫『昔話とは何か』（小澤昔ばなし研究所、二〇〇九年）
村瀬学『食べる思想』（洋泉社、二〇一〇年）
石田、濱野佐代子、花園誠、瀬戸口明久『日本の動物観　人と動物の関係史』（東京大学出版会、二〇一三年）

付表（『赤い鳥』欧米昔話関連作品）

No.	作品名	作家名	国	発表年月	巻	号
1	大いたち	鈴木三重吉	北米土人	大正７年（1918）６月	1	1
2	わるい狐	小島政二郎	ロシア	大正７年（1918）６月	1	1
3	ぶくぶく長々火の目小僧（上・下）	鈴木三重吉	ロシア	大正７年（1918）６月 大正７年（1918）８月	1 1	1 2
4	水獺	鈴木三重吉	北米土人	大正７年（1918）８月	1	2
5	正直もの	小山内薫	ロシア	大正７年（1918）８月	1	2
6	かじり大王	丹野てい子 （鈴木三重吉）	イタリア	大正７年（1918）８月	1	2
7	小人の謎	南部修太郎	イギリス	大正７年（1918）８月	1	2
8	蟻と驢馬	秋庭俊彦	不明	大正７年（1918）８月	1	2
9	魔法の魚（上・下）	鈴木三重吉	ロシア	大正７年（1918）８月 大正７年（1918）10月	1 1	3 4
10	蛙の王女	佐藤春夫	ロシア	大正７年（1918）８月	1	3
11	湖水の女	鈴木三重吉	ウエイルス	大正７年（1918）８月	1	3
12	狐とお菓子	鈴木三重吉	アイルランド	大正７年（1918）10月	1	4
13	鷹の御殿	秋田雨雀 （鈴木三重吉）	ロシア	大正７年（1918）10月	1	4
14	ボビノが王様になった話	野上豊一郎	グリム	大正７年（1918）11月	1	5
15	馬鹿	鈴木三重吉	グリム	大正７年（1918）11月	1	5
16	子供の極楽	松居松葉	ギリシャ	大正７年（1918）11月	1	5
17	大熊中熊小熊	佐藤春夫	イギリス			
18	命の水	丹野てい子	グリム	大正７年（1918）12月	1	6
19	三匹の小豚	鈴木三重吉	不明	大正７年（1918）12月	1	6
20	啄木鳥	青木健作 （鈴木三重吉）	ノールウェイ	大正７年（1918）12月	1	6
21	ゼメリイの馬鹿	鈴木三重吉	ロシア	大正８年（1919）１月	2	1
22	欲張り猫	鈴木三重吉	ノールウェイ	大正８年（1919）１月	2	1
23	雪娘	三宅周太郎	ロシア	大正８年（1919）１月	2	1
24	鳥の着物	南部修太郎 （鈴木三重吉）	北米土人	大正８年（1919）１月	2	1
25	星の予言（上・中・下）	鈴木三重吉	イタリア	大正８年（1919）２月 大正８年（1919）３月 大正８月（1919）４月	2 2 2	2 3 4
26	平気の平左	小山内薫	アイルランド	大正８年（1919）２月	2	2
27	灰色の小人	野上豊一郎	グリム	大正８年（1919）２月	2	2
28	悪い狐	鈴木三重吉	ノールウエイ	大正８年（1919）２月	2	2
29	石臼と塩の話	丹野てい子	グリム	大正８年（1919）２月	2	2
30	お人形さん	南部修太郎 （鈴木三重吉）	ノールウエイ	大正８年（1919）２月	2	2
31	どんぐり小坊主	丹野てい子 （鈴木三重吉）	不明	大正８年（1919）３月	2	3
32	小さな土産話　一　兎と針鼠	島崎藤村	グリム	大正８年（1919）３月	2	3
33	がらすの山	丹野てい子	グリム	大正８年（1919）４月	2	4
34	白い鳥の話（上・中・下）	久保田万太郎	グリム	大正８年（1919）５月 大正８年（1919）６月 大正８年（1919）７月	2 2 2	5 6 7
35	七面鳥の踊	鈴木三重吉	北米土人	大正８年（1919）５月	2	5
36	大法螺	鈴木三重吉	ロシア	大正８年（1919）６月	2	6

37	お爺さんと三人の婿	樋口やす子 （鈴木三重吉）	ロシア	大正８年（1919）７月	3	1
38	山羊の角	湯目節子	オランダ	大正８年（1919）８月	3	2
39	鳥の言葉獣の言葉	樋口やす子 （鈴木三重吉）	ロシア	大正８年（1919）９月	3	3
40	金糸鳥物語（一・二・三・四・五）	鈴木三重吉	フランス	大正９年（1920）１月 大正９年（1920）２月 大正９年（1920）３月 大正９年（1920）４月 大正９年（1920）５月	4 4 4 4 4	1 2 3 4 5
41	あひる	久米正雄 （鈴木三重吉）	フランス	大正９年（1920）２月	4	2
42	大当てちがひ おぢいさんと三人のわるもの	樋口やす子 （鈴木三重吉）	不明	大正９年（1920）６月	4	6
43	赤いか、青いか	鈴木三重吉	デンマーク	大正９年（1920）８月	5	2
44	金の毬	樋口やすこ （鈴木三重吉）	北米土人	大正９年（1920）８月	5	2
45	跛の狐 びつこの狐	鈴木三重吉	不明	大正９年（1920）９月	5	3
46	藁の牛	小林哥津子	不明	大正９年（1920）９月	5	3
47	ある男爵のお話	樋口やす子 （鈴木三重吉）	ドイツ	大正９年（1920）10月	5	4
48	蟹の王子（一・二）	樋口やす子 （鈴木三重吉）	不明	大正９年（1920）11月 大正９年（1920）12月	5 5	5 6
49	少年と魔女	楠山正雄	デンマーク	大正９年（1920）11月	5	5
50	骸骨の島	丹野てい子 （鈴木三重吉）	北美土人	大正10年（1921）３月	6	3
51	馬鹿の笛	丹野てい子 （鈴木三重吉）	アイルランド	大正10年（1921）５月	6	5
52	黒い鳥	丹野てい子 （鈴木三重吉）	アイルランド	大正10年（1921）８月	7	2
53	イルゼベルの望み	小山内薫	グリム	大正10年（1921）９月	7	3
54	やんちや猿（一・二）	鈴木三重吉	ブラジル	大正11年（1922）５月 大正11年（1922）６月	8 8	5 6
55	ぶつぶつ屋	鈴木三重吉	フランス	大正11年（1922）７月	9	1
56	巨人	鈴木三重吉	アイルランド	大正11年（1922）８月	9	2
57	おなかの皮	鈴木三重吉	不明	大正11年（1922）９月	9	3
58	神の下僕	丹野てい子 （鈴木三重吉）	不明	大正12年（1923）12月	9	6
59	なまけもの	鈴木三重吉	不明	大正12年（1923）５月	10	5
60	棄てられた猫	宮原晃一郎	ロシア	大正13年（1924）１月	12	1
61	悪狐	鈴木三重吉	ドイツ	大正13年（1924）２月	12	2
62	正直もの	小野浩 （鈴木三重吉）	グリム	大正13年（1924）２月	12	2
63	鼻ッ張りの強い狼	楠山正雄	不明	大正13年（1924）７月	13	1
64	悪魔の尾	宮原晃一郎	西洋もの	大正13年（1924）８月	13	2
65	頓助の物語	宇野浩二	ロシア	大正13年（1924）８月	13	2
66	昼の出来た話	宮原晃一郎	北欧	大正13年（1924）11月	13	5
67	雪のだるま	宇野浩二	ロシア	大正14年（1925）２月	14	2
68	三人兄弟	細田民樹 （鈴木三重吉）	アイルランド	大正14年（1925）７月	15	1

69	優しい娘の話	宇野浩二	ロシア	大正 14 年（1925） 9 月	15	3
70	センタアの教子	中村星湖	ギリシャ	大正 14 年（1925） 9 月	15	3
71	山羊の耳	細田民樹	ギリシア	大正 15 年（1926） 2 月	16	2
72	幸房の猫と鶏	宮原晃一郎	ロシア	大正 15 年（1926） 2 月	16	2
73	鷲と亀の禿頭	中村星湖	ギリシア	大正 15 年（1926） 3 月	16	3
74	ダマスカスの賢者	鈴木三重吉	不明	昭和 2 年（1927） 2 月	18	2
75	運命	成田成寿	シシリア	昭和 4 年（1929） 3 月	22	3
76	ばかそろひ	井伏鱒二	フランス	昭和 6 年（1931） 6 月	1	6

表 I

食べる側	食べられる側	食い合い場面	作品名
大いたち	鴨	大鼬は、おしまひのアムアムアムのところへ来ると、わざと、力一ぱい大声を張り上げて歌いました。そして、そのたんびに、「アムアムアム、ギュツ」と、鴨の頸をつかまへと、一ぴきづつ、袋の中へ入れました。	大いたち
土人	鴨 A	土人は早速鍋の蓋を開けて、煮えかけた鴨を、一匹も残さず、がつがつ食べてしまいました。そして、あとの骨を、すつかり鍋の中へ入れといて、さつさと帰つて行きました。	大いたち
鳥	鴨 A	「やあい、馬鹿。お前には大きな身をやらうと思ってちゃんど別にしといたのになぜそんな余計な告げ口をするんだい」	大いたち
狐	雌鶏二匹 A	森に住んでゐる狐がやって来て、クズマの大事な雌鶏を二匹食べて行きました	わるい狐
ぶくぶく C	何千人の兵士と馬	ぶくぶくは、その何千人といふ兵たいが、すっかりお腹の中へ入ってしまふ	ぶくぶく長々火の目小僧
小鳥	虫、蚯蚓 A	虫や蚯蚓を、片方の手の平へ一ぱ捕って来て、それを二人に食べさせてやりました	魔法の魚
蜘蛛	蠅 A	蜘蛛は、その網の真ん中で、たっだ今捉へたばかりの蠅をたべようとしてゐました	魔法の魚
狐 B	お菓子 B	狐は鼻先でお菓子を弾きあげて、大きな口を開けてばくりと食べてしまひました	狐とお菓子
狼	羊二三匹 A	狼は、その間に、羊を二三匹食べちらかして、とっくに逃げてしまひました	馬鹿
狼 B	子豚 B	するとある日狐がのこのこやつて来て、泥の家と玉葱の家へは雑作なく穴をくりあけて、中の二人を引き出して、担いで行つてしまひました。	三匹の子豚
ゼメリイ	カマス C	「ああ、ましましゼメリイさん、後生だから、そんなことを言はないで、どうかもとの青い水の中へ逃して下さいな。その代りあとでどっさりお礼をしますから」	ゼメリイの馬鹿
猫 C	牝牛・栗鼠・百姓・鼬・狐・兎・小熊・大熊・お嫁さんの行列・お月さま・お日さま	猫はそのお嫁さんもお供の人も、御者も馬丁も馬も一人も残さずペロペロペロペロと食べてしまひました	欲張り猫
熊	豚の肉 A	灰色の大熊が、森の水の下で、旨しさうな豚の肉を食べてゐます	悪い狐
針鼠 B	兎 B	兎はもう力がつきて、倒れてしまひました。雄と雌の針鼠は、この勝利の獲物を自分たちの巣のほうへ運んで行きまして、いい御馳走にありつきました、とさ	小さな土産話　一兎と針鼠
鷹 C	ヒヨックリ	「おや、あんな所に小さな奴が登って来てゐるぞ。どれ、暫くこの山へ誰も登って来なかったので、お中が透いて溜らん。一つ、あれを食べてやれ。」	がらすの山
兎 B	七面鳥 B	そして「とんとことんとん、とんとんとん」のたんびに、キュッ、キュッと、一ぴきつづ頸を引ッつかんでは、片端から袋の中へねぢ込みました	七面鳥の踊

狼 B	蜜蜂 B	昨日の蜜蜂が、夜のうちに狼に食はれてしまったのです	大法螺
狼・番犬	羊 A	「よし、では黙って見てゐてやるから羊を二三匹殺したら、俺たちにも肉を分けておくれ」	鳥の言葉獣の言葉
娘	魚 A	女の子はその魚をお料理にして、おいしいご馳走をこしらへました	赤いか、青いか
ぶつぶつ屋	魚 A	お魚は、フライにしたのがあるし、干したのもあるし、焼いたのも生干しのもあって、そのおいしいことと言つたらまるで頬もぬけおちてしあひさうです	ぶつぶつ屋
猫・鸚鵡	魚の切れ A	鸚鵡が来てもたった一ぱいの牛乳と、魚の切れをたった一ときれしか出さないでそれを二人で食べようと言ふのです。	おなかの皮
猫 C	鸚鵡・お婆さん・驢馬・馬方・王さま・王妃・兵隊・象・蟹	そして、その次には何十匹といふ象をも、又ペロペロペロペロと、一匹も残さず全呑みにしてしまひました。	おなかの皮
狼 B	なまけもの B	狼が、ウオウオと呻るのが聞えて来ました。なまけものは、びっくりしました。ここで下手にのろのろしてゐてあの狼に喰はれでもしたらおしまひだと	なまけもの
猫	仔羊・仔豚 A	食べた　猫はおいしい肉を鼻の先にきたので、まづ仔羊から一口食べてやらうと、穴から出ました。	棄てられた猫
猫・のら犬・狐	魚の腸 A	「この冬にも、私が何も食べたものがなくて困ってゐますよきに、やうやう魚の腸を一ときれ拾って来て、木の下にかくしておきますと、狐が出来来て、むりやりに取ってしまひました」と言ひました	悪狐
狐 B	兎 B	狐は兎がはじめてうたった歌がまづいと言って、咽へ食ひついてゐるのでした。	悪狐
狼	魚 A	狼はその魚を買って食べたいと思ひました	悪狐
狐 B	野鳩の子供・蚯蚓の子供 B	野鳩が、「王さま、それは大うそでございます。狐は、私の小さな子供を、九人まで取って食べました。みみづくの子供も殺して食べました」	悪狐
猫	鼠 A	「こちらの家の物置小屋の中には、鼠がどっさりゐるよ。丁度入るのにいい穴があるから来て御覧。二三匹食べて、それから一しょにあっちへ廻ればいいぢやないか」と上手にだましてつれて行きました	悪狐
狐	鶏 A	食べた　狐は前の晩に、その穴から入りこんで、中に入れてあった、一ばん肥った鶏を一羽とって食べたのです。	悪狐
獅子	水牛 A	獲物　食べた　一匹の水牛が来て、沼の水をのんでゐました。獅子は山をかけ下りて、水牛を嚙みころしてしまひました。	鼻ッ張りの強い狼
狐	鶏 A	［私は油揚げよりも、いっそのこと鶏を一羽食べたいんですが、］と狐はいひました	雪のだるま
黒猫	魚の骨 A	娘は鼠の代わりに、来る途で拾って来た魚の骨をやりますと、黒猫はそれを喜んで食べてから	優しい娘の話
親子の鷲	野兎・山鶏・蛇 A	親子の鷲は、昼間捕へて来ておいた野兎だの山鶏たのの蛇だのの肉をむさぼり食ってから	鷲と亀と禿頭

表II

殺す側	殺される側	殺す場面	作品名
国王	求婚者 C	そんなわけで、来る人人が、一人ものこらず、みんな王さまに切り殺されてしまひました	ぶくぶく長々火の目小僧
お爺さん	鶏 A	(お爺さんは) 大いそぎでその鶏の頭を割って見ますと、なるほど、魔法つかひが言ったとほり、きれいな小さな石の玉が出て来ました。	かじり大王
蟻	ほかの虫（蜘蛛）A	それにまた大変に気の強い蟻で、ほかの虫を見つけると、すぐに嚙みついて殺してしまひました。蜘蛛にさへもずんずん手向って行きました	蟻と驢馬

家来	蜘蛛 A	家来はそれを見ると、ためしに、死の水を少しばかりその蜘蛛へ振りかけて見ました。すると蜘蛛は忽ちころりと死んでしまって。	魔法の魚
王様	王様 C	早速、役人をお召になり、これこれかういふわけだから、みんなで己を斬り殺してくれとお言ひつけになりました。役人たちは、さういふお言ひつけなので、仕方なしに王さまの首を斬り落としました	魔法の魚
王子様	魔法使い B	実は、ワシリサ姫はあまり美しくて、悧巧すぎるといふので、まだほんの子供のころに、悪い女の魔法使ひにねたまれて、青蛙にされて居たのでした。それがこの時初めて皆にわかりました。勇ましいイワン王子は直ぐさまその魔法使を探して征　をしました。	蛙の王女
鍛冶屋	犬 A	恐ろしい犬が、宝物の張番をしてをりました。けれども、鍛冶屋の槌の一打で、その犬は殺されてしまひました。	灰色の小人
召使	犬 A	幸ひ犬がついて来ましたから、あれを殺して、心臓を切り取って持って帰りませう	ボビノが王様になった話
子豚	狼 A	すると、その真下の鍋の湯がもうぐらぐらに煮え立つている中へ、どぶんと真つ逆さまに落ち込んで、「うわア熱い熱い熱い。」ともがくうちに、体中は忽ち赤ただれになつて、それなりに死んでしまいました。	三匹の子豚
ポリツシ	野猫 A	(ポリツシは) 近所の森の中へ入って行って、大きな野猫を捕へて、いきなりその爪を剝しました	がらすの山
ボリッシ	鷲 B	(ポリッシ) は今まで掴まへてゐた二本の足を横にさっと切り払ひました。鷲は血の滴る足を震わせながら、二声三声悲しさうに啼き立てたかと思ふと、やがてばたばたもがきながら、麓の方へ転げ落ちて行きました	がらすの山
若者	獣（牝鹿）A	獣さへ出て来たら、そいつを手斧で切り殺し、その皮を剝いで袋をこしらへて、その中へ蜜を入れて、担いでかへらうと思ったのです	大法螺
カリフ	大男 B	(カリフが) 持って来た山羊の角で大男の横腹のあたりを位一突きぐさと突き刺しました。大男は手足をもがきながら、その儘苦しみ死に死んでしまひました	山羊の角
大羊飼	犬 A	(大羊飼は) すぐに、一ばん年を取った正直な老犬をのけて、あとの犬をすっかり刀で切り殺してしまひました	鳥の言葉獣の言葉
狐	七面鳥・鶏 A	狐はいきなり飛びかかって、その七面鳥や鶏を瞬く間に一匹も残さず引き裂いてしまひました	あひる
蜂たち	王さま C	蜂たちはしまひには王さま一人を目の敵にして、ぶんぶん刺し通しに刺しましたので王さまは、「ああ痛い痛い痛い、痛い痛い痛い。」と狂人のやうに泣き狂ひながら、とうとう外の往来へ飛び出してばったり倒れて死んでおしまひになりました	あひる
お爺さん	三人の悪者 C	お爺さんは、くるくるとかたく袋の口を縛っておいて、よ、どつこいしょのしょ、ドブンと川の中へ落してしまひました	大当てちがひ
獅子・猫	熊 A	熊は忽ちどしんと木の上から転がりおちて、ううんと言ふなり動けなくなってしまひました	金の毬
男爵	悪い奴 C	おれはそいつの頸の上へどしんと飛び下りたので、その男は頭の骨をへし折って、ううんと言ったきり死んでしまった。併しよかったよ。そいつは大変な欲張りの悪い奴で、いつも飼料を法外にたかく売りつけるので、ひどく人に憎まれてゐたのださうだ。だからおれが殺したってだれもぐずぐず言ふものはゐなかったよ	ある男爵のお話
王子	お婆さん B	その家に出るときに、王子は毒をお菓子の中へいれて、台の上へおいておきました。それから、お婆さんは王子たちが逃げてしまったあとへ、のそのそかへって来ました。そして、台の上にあるお菓子を食べて、そのはげしい毒にあたって忽ち死んでしまひました	蟹の王子

魔女	娘 B	魔女はきらきら光る包丁をもって部屋に中にそって入って来て、暗やみで寝間帽子を探り探り、十一人の兄弟達だと思って、十一人の娘達の首をのこらず切って落してしまひました	少年と魔女
王様	赤士爵 C	王様はお喜びになって十一人の兄弟をゆるしていぢの悪い赤士爵をその代りに死刑になさいました	少年と魔女
若もの	魔物 B	若ものたちは舟の中でびくびくしてゐましたが、いかに魔物でもこれだけの湖水の水が飲みつくせよう筈もありません。そううちにお腹がぽぽんと張りさけて、そのまま死んでしまひました	骸骨の島
山羊飼	虎 A	(山羊飼は) 鉄の棒をふりかざして、虎の頭をううんといふほどたたきつけました。虎はその一とうちで殺されてしまひました	やんちや猿
ライオン	狐 A	(ライオンは) つかんでゐる狐の顔を、ぽんと、自分の前脚へたたけつけました。	悪狐
悪魔	悪魔 B	(悪魔) 互に魔法のありつたけを尽くして戦争しましたが、いたづらに双方が怪我をしたり、死んだりするばかりで一向勝負はつきません	悪魔の尾
殿様	床屋 C	「はい……。恐れ入りますが、山羊の耳によく似たお耳でいらつしゃいます。」と、揃いも揃つて答えたものでした。すると殿様は、その返事を待ちかまへてでもいたかのように、「やッ！」という掛声と一しよに、その床屋を手討ちにしてしまはれるのでした。	山羊の耳

表Ⅲ

殺す側	殺される側	殺す場面	作品名
王様	王子	１王さまは、王子に向かって「では試に番をして見るがよからう。併し、もし、うっかり居眠りをして、王女を部屋から逃がすと、早速お前たち四人の命取るが、それでもいいか。」と念をお押しになりました ２王女はそれを聞いて、「では、きつと、お父さまの兵たいがあなた方を殺しにまいりましたのでございませう。私、いいことがございます。一寸お待ち下さいまし。」と息を切らしながらかう言つて、王子たちに手を放して貰いました。	ぶくぶく長々火の目小僧
王様	娘	(王様は)「さあ、おはじめ。いいか、明日の朝までにこの藁をすっかり金の糸にして見せないと、お前の命はないぞ」(怖い)	小人の謎
狼	兎	「お前は俺の言ふ事を聞かなかつたから、その罰に殺してやる。併し、今日は俺も俺のお上さんも、御飯を食べたばかりでお腹が一ぱいだし、それに餌食もまだ五日分位はあるから、それの無くなるまで、お前はそこの藪の下で待つてゐるのだ。その時になれば、勘弁してやるかも知れないよ。」／狼はかう言つて笑ひました	正直もの
王さま	家来	１「お前だって、一と切れでも食べると、すぐに切り殺すぞ」 ２「さあ、の縁まで、一ぱいつげ。よく気をつけて、あふれないやうにつぐのだよ。一と雫でもこぼすと、命をとるぞ」「さあ来い。首斬りの役人に引き渡すから、こっちへ来い」「では、今鳥がはなしてゐた、あの金の髪の王女をさがし出して、私のお嫁に貰って来い。さうすれば殺すのだけは許してやらう。それができないと言へば今すぐに切り殺してやる」 ３「あんなひどい罪を犯したからには、死刑はとても逃れられないが、その代りに死骸を鳥や獣に食はせるのだけはゆるしてやらう」とうとうその家来を斬り殺しておしまひになりました。	魔法の魚

お父さん	ボビノ	「あなたが悪いこともなさらねば、別に越度もありませんでした。けれども何年も学問をなさいましたのに、動物の言葉より外になんにも覚えていらっしやらなかったので、お父様は気ちがひのやうにおこってお出でです。つまり、お父様はあなたにもっと外のことを勉強して貰ひたかったのです。あなたを殺したくなったといふのもさういふわけからでせう」	ボビノが王様になった話
王様	ヂオノ	１王さまは、そんなわけで、もうあたり前の手ではその子を奪ひ取ることができないものですから、とうとうしまひには、悪い計略をめぐらして、或一人の悪ものを雇って、その赤ん坊を上手に盗み出してこッそりと殺して来いとお言ひつけになりました ２弟さまの王さまへあてたお手紙には、この使のものは甚だよくない奴だから、そちら着くと、すぐに牢屋にいれて、中でこっそり殺してしまつて下さいと、こんな無慈悲なことを認めてお置きになりました ３「何だ、お前はこの王女を奪ひ取って、スペインの王位を盗まうとした、極悪の大罪人ださうではないか。そんな奴が王女を貰ぶどころか、これからすぐに切り殺してやる。こりゃ、ここへ来ておとなしく命をわたせ」	星の予言
王様（年をとった家来）	レベッカ	裁判官は王女を最も重い刑にすることといひ渡しました。最も重い刑といふのは磔にすることでした。	白い鳥の話
兄二人	頓助	この二人の兄が、頓助の油断を見計らって、夜更に頓助を海に突き落としたのでした	頓助の物語
地主のお父さん	ピイタア	「づうづうしいやつだ。おい、ジャック、お前すぐに行って撃ち殺してこい。面は見たくない。死骸は棄てて、心臓を引きずり出して持ってかへれ。犬に喰はしてしまふのだ」	三人兄弟
殿様	若もの	「頭をあげよ。」と、気短かな殿様は、もう刀の柄に手をかけておつしやいました。「近頃、余のことを、あれこれと悪しざまに取り沙汰いたすものがあるがそれはお前の言ひふらしたことに相違あるまい。」	山羊の耳